

平成 29 年度第 2 回 IODP 部会執行部会 議事録

日時:2017 年 9 月 22 日(金)13:00~17:00

場所:東京大学地震研究所 1 号館 3 階 会議室

出席者:

執行部:益田晴恵(部会長・大阪市立大学) 木下正高(部会長補佐・東京大学 ERI)
狩野彰宏(東京大学) 黒田潤一郎(東京大学 AORI) 黒柳あずみ(東北大学)
林 為人(京都大学) 針金由美子(産業技術総合研究所) 道林克禎(静岡大学)
村山雅史(高知大学) 森下知晃(金沢大学) 山田泰広(JAMSTEC ODS)

リエゾン:小村健太郎(陸上掘削部会長・防災科学技術研究所)

オブザーバー:渡辺達也(MEXT) 木村 学(J-DESC 会長・東京大学)

倉本真一(JAMSTEC CDEX) 沖野郷子(科学推進専門部会長・東京大学 AORI)
岡崎裕典(SEP・科学推進専門部会・九州大学) 阿部なつ江(SEP・科学推進専門
部会・JAMSTEC ODS) 肥田慎司(JAMSTEC 研究推進部)

事務局(JAMSTEC CDEX):江口暢久 木戸ゆかり 高橋可江 江橋由美
双木真理子(事務局紹介後退出)

欠席者: 齋藤めぐみ(国立科学博物館) 稲垣史生(EFB・JAMSTEC ODS)

議事次第

1. 事務局体制変更について
<審議・意見照会>
2. 前回会議(170624)議事録(案)確認・承認 資料 1
3. 活動スケジュールの確認 資料 2
4. J-DESC 組織見直しの現状
5. SEP 委員からの意見書 資料 3
6. コミュニティを活性化するシンポジウム/ワークショップ等の開催検討 資料 10
7. 大型研究予算等の獲得に向けた検討 資料 11
8. オマーンコア試料船上分析の総括と今後について
9. JpGU 2018 の地球掘削科学セッション 資料 12
10. J-DESC コアスクールロギング基礎コースの開催 資料 4
11. 会計担当の選出
12. 海外機関所属者による乗船応募の扱い 資料 5
13. 出張報告書の受領基準と活用方法
14. その他
<報告>
15. SCORE プログラムの現状報告 資料 6
16. IODP の動向
 - ・掘削航海動向報告 資料 7
 - ・国際動向報告(Australasian WS 報告、IODP Forum 報告) 資料 8
 - ・国際委員ローテーション 資料 9
17. 陸上掘削部会の動向
18. その他

配布資料

- 資料 1 前回執行部会(170624)議事録(案)
資料 2 J-DESC 長期主要スケジュール
資料 3 SEP 委員からの意見書
資料 4 JDESC ロギング基礎コース企画書
資料 5 海外機関所属者の乗船応募について

- 資料 6-1 SCORE 周知リーフレット
- 資料 6-2 SCORE 掘削提案一覧及びコメント
- 資料 7-1 掘削航海スケジュール
- 資料 7-2 乗船決定・応募者リスト
- 資料 8-1 Australasian WS 報告
- 資料 8-2 IODP Forum 報告
- 資料 9 国際委員ローテーション表
- 資料 10 ワークショップ開催提案
- 資料 11 大型研究マスタープランに向けて
- 資料 12-1 JpGU 2018 地球掘削科学セッション提案
- 資料 12-2 JpGU 2017 地球掘削科学関連セッション

議事録

1. 事務局体制変更について

9月1日より、JDESC 事務局を JAMSTEC 研究推進部から CDEX 科学支援部内に移管したと、江口より紹介があった。

<審議・意見照会>

2. 前回会議(170624)議事録(案)確認・承認 資料 1
 会議終了までに特別な修正の指摘はなく、原案通りに承認された。

合意事項(Consensus_170922-01) : 前回会議(170624)議事録を原案通りで承認する。

3. 活動スケジュールの確認 資料 2
 次回の会議等の確認

4. J-DESC 組織見直しの現状

木村会長より、JDESC 組織改革に向けて、タスクフォース(TF)の立ち上げ、Basecamp のコミュニケーションツールの活用、Zoom 利用で会議の効率化を図る等の状況が紹介された。TF の活動は今後本格的に動き出す予定である。次回 IODP 部会(11月24日(金))午前中に Task Force 会議 (face to face & Zoom)開催予定。

合意事項(Consensus_170922-02) : 次回執行部会の開催は、11/24(金)13-17:00、午前中に TF、次々回は 1/19(金)13-17:00 とする。

実行項目(ActionItem_170922-01) : Basecamp と Zoom 会議の調整を事務局で行う。

5. SEP 委員からの意見書 資料 3

岡崎 SEP 委員より、現在の SEP を取り巻く状況に関して、現在の SEP 委員の総意で書かれた意見書の説明がなされた。SEP における議論のあり方が変化し、現在の SEP 会議では、JRFB 議長や IODP Forum 議長など SEP 委員以外のリエゾンの発言が議論を左右

するケースが目立ってきている。SEP 委員は担当するプロポーザルを科学的に評価する点は従前と変わらないが、プロポーザルの諾否に至る議論において、過去の事例など科学的要素以外の事柄にも精通する参加者の発言が重みを増している。これまでに、この状況によって日本発のプロポーザルが不利益をこうむった例はないが、このような状況を J-DESC IODP 部会執行部が共有し、プロポーザルの諾否の議論において決定的な役割を果たしうる委員の人選 (IODP に精通したシニア研究者)、SEP 会議へのリエゾン派遣 (CIB、J-DESC、文科省など) による日本からの情報発信の活発化、J-DESC IODP 部会と SEP 委員及び FB 委員の有機的な連携について考えるべきである。これを受けて、参加者による議論が行われ、下記の意見が述べられた。

- ・シニア研究者に加えて、サイズミックのわかる人が常時委員にいることも重要。
- ・現在の SEP 議長は二人ともアメリカ人であり、議長の発言が強いことには、ヨーロッパからのメンバーも危機感を持っている。
- ・以前と比較して、サイエンスだけでなく、政治的思惑が絡む場合が出てきている (例えば、ブラジルの例)。
- ・前 IODP とは異なり、現在は「JRFB の SEP」というストラクチャーになっている。良い悪いではなく、構造としてやむを得ない面があり、そこを踏まえての対応が求められる。
- ・JRFB においても、予定されたシフトトラックが先にあり、それに合うプロポーザルが必要といった議論が公然となされるようになってきている。
- ・J-DESC IODP 執行部会が、SEP で何が議論になっているのか情報共有できる仕組みを作り、コミュニティとしての協力体制が必要である。このためには、執行部会でリーダーシップを発揮すべきである。
- ・コミュニティが大きくなり、参加機会の競争が激しくなる中、バランスをとりながらサイエンティフィックなフェアネスも維持することは難しいが、J-DESC としては、コミュニティの質を上げていく (例えば日本発のプロポーザルの数を増やす) 好機と捉えることも大事である。

6. コミュニティを活性化するシンポジウム/ワークショップ等の開催検討..... 資料 10
沖野科学推進専門部会長より、科学推進専門部会で議論された日本の掘削科学の現状・問題点とそれを踏まえた提案が紹介された。主な問題点として、日本発のプロポーザルの減少、コミュニティの固定化、国際的 (特にアジア太平洋域) 協力体制の弱さが挙げられる。現在の J-DESC のプロポーザル作成支援のシステムは、概ねプロポーザルが準備中であることが前提となっている。これは苗があるものを育てるものであり、種から育てるシステムではない。夢やアイデア、サイエンティフィックな雑談が自由にできる場がなく、タネを発掘できていない。また、IODP の仕組みや審査プロセスを実感しないと、タネの育て方がわからないし、丈夫に育たないと感じている。2008 年に行われた、国内 INVEST の総括 (その後プロポーザルにつながったのか? コミュニティは広がったのか?) を行い、他のワークショップ (WEPAD や Australasian IODP regional planning WS など) の調査を行なったのち、タネを育てる場として、サイエンティフィックな雑談セッション

ン、掘削科学の現状とプロポーザルのイメージをつかむ入門セッション、研究分野・対象海域ごとのワークショップやプレプレプロポーザルとなる White Paper 書き、などを行うことが提案された。

益田部会長より、Exp.364_Chicxulub は、これまで海洋掘削と関係が薄いコミュニティから提案され、ICDP 枠での陸上掘削を経て、10 年以上経って IODP 掘削を最終的に実現した、新たな分野発掘型として好例である。日本からもこのようなプロポーザルを発信したいとの意見があった。

諸外国の WS 作成状況や IODP を取り巻く情勢について、事務局より紹介を行った。以上を踏まえて委員による議論が行われ、下記の意見が述べられた。

- ・プロポーザル作成 WS を国内で閉じてしまわず、アジア圏で国際的にやっていく必要があるのではないか。(阿部 SEP 委員)

- ・研究者コミュニティへの掘削に関する広報が必要である。学会等で興味深いアイデアを持つ研究者へ J-DESC メンバーが声をかけ、掘ればこれだけわかる、と理解していただく活動を通じて、コミュニティを広げる努力をするべきだろう。(山田委員)

- ・CDEX としては、小中高校生向けの出前授業を行っている。J-DESC は、教育や SSH 校向けに組織立ってやっていくのがいいのでは。J-DESC に加盟するメリットを考えたい。(江口)

- ・掘削科学へ興味を持つような仕組み。大学院生向けの集中講義では、半日を掘削提案作成にあてている。面白い内容が出れば、J-DESC へフィードバックをかけるようにしたい。同様に、J-DESC の教員各自が普段の授業などに掘削科学を組み入れるよう働きかけてはどうか。(黒田委員)

- ・若手を引き上げる大人が必要である。成功しているプロポーザルには、強いリーダーと協力メンバーがいる。若手に火をつけるのは我々の仕事である。(森下委員)

- ・授業で掘削科学をやっている、外部から講師を呼ぶことも。地道な努力が必要である。即戦力になる学生、リーダーの育成、ポストクを安定職業に就けられるように努力したい。(林委員)

- ・US School of Rock のような高校教員へのレクチャー、博物館へのインプットをしてみてもいいか？(針金委員)

- ・高知でも試行錯誤している。高校理科部会の教員を夏休み中に呼び、情報提供している。(村山委員)

- ・漠然とした WS ではなく、INVEST に White paper を書くように、題目を掲げ、集中できる体制を作る。(阿部 SEP 委員)

3 月にサイエンティフィックな雑談を行う場を含めたような、IODP-ICDP 共同のワークショップを開催することを決め、それに向けタスクフォースを立ち上げ具体的に準備をすることとなった。タスクフォースのメンバーとして、木下部会長補佐、針金委員が指名された。加えて科学推進専門部会から 2 名程度、陸上掘削部会からも 1 名程度選定することとなった。

合意事項(Concensus_170922-03):掘削科学の後継者をどう育てるか、掘削科学に対する社会的理解を得ること、雑談的な内容も含めて、大学関係者が参加しやすい2018年3月にシンポジウムを計画する。

実行項目(ActionItem_170922-02):事務局取りまとめで、企画準備チームを立ち上げ、10月半ばまでに具体的な形にする。

7. 大型研究予算等の獲得に向けた検討 資料 11
木下部会長補佐より、「海陸・掘削統合観測」計画について経緯説明が行われた。今後、10年、20年先を見据えた大型マスタープラン2020に向けて、高压コンソーシアム、情報科学を取り込む。社会貢献よりサイエンスとして面白い内容、夢を語れるものを考える。マントル掘削をダシにして、10年後の未来を語る等。トップダウンの戦略として10月からスタートする24期学術会議から提言する。

合意事項(Concensus_170922-04):大型マスタープラン2020は、2019年秋にできあがるようなスケジュールで支援する、2018年3月のシンポジウムでは、決起集会をする。

8. オマーンコア試料船上分析の総括と今後について
道林委員より、全体の報告があり、続き、2ヶ月フル乗船された阿部 SEP 委員より、船上の様子や課題などが紹介された。J-DESC から人件費の措置を JAMSTEC 理事長に依頼した経緯もあり、お礼を兼ねて早めに報告に上がる。

9. JpGU 2018 の地球掘削科学セッション 資料 12
山田委員より、J-DESC 活動を内外に明示する機会として JpGU 2018 において「地球掘削科学」セッションを提案するための原案説明があり、承認された。次世代育成のために代表者をローテーションさせることと、コンビーナー構成はジェンダーバランスを考慮すべきというコメントがあった。

合意事項(Concensus_170922-05):地球掘削科学セッションを2018年JpGUでも提案する。

実行項目(ActionItem_170922-03):2019年度は代表者を次世代に引き継ぎ、ジェンダーバランスを考慮したコンビーナー構成とする。

10. J-DESC コアスクールロギング基礎コースの開催 資料 4
例年メール審議事項であるが、執行部会開催のタイミングで企画書が提案されたため議事に加えた旨、事務局から説明があった。山田委員より、本件は10回目の開催となること、海外の留学生も受け入れてきたため、テキストは英文で説明は日本語でなされることなどの補足説明があった。予算案のミスタイプを修正し、承認された。関連して、参加者の乗船や就職先などの追跡調査をしてはどうかとの意見が述べられた。

合意事項(Concensus_170922-06) : J-DESC としてコアスクールロギング基礎コース開催を承認する。

実行項目(ActionItem_170922-04) : 早急にウェブサイト、ML を通して事務局から募集を開始する。

11. 会計担当の選出

東北大学の黒柳あずみ委員に引き続き会計担当をお願いすることになった。

合意事項(Concensus_170922-07) : 2018 年度 J-DESC IODP 部会会計担当を東北大学黒柳あずみ委員とする。

12. 海外機関所属者による乗船応募の扱い 資料 5

事務局より、本件、少ない乗船枠を国内の研究者で有効に使うよう、曖昧なルールを改めて規定化したい。時間をかけて審議し、日本のプレゼンスを高めたいとの提案があり、次回執行部会まで事務局預かりとなった。

実行項目(ActionItem_170922-05) : 事務局にて海外機関所属者による乗船応募の扱いに関するルールのたたき台を作る。

13. 出張報告書の受領基準と活用方法

事務局より、パネル委員会や WS 等の参加報告書に関して、改善を提案したい。ウェブ公開され記録として残るため、それなりのクオリティを求めたい。しかし、同じ会議に出席する場合は、代表者が作成することも認めてはどうかと提案があった。

参加者から、提出すれば良いというものでもないし、何でも広く公開すれば良いということでもなく、公開できない機微な内容こそ報告してもらい意義があるとの考え方もあり、事務局の悩みを理解するとともに感謝したい、重要なのは配布範囲とアクセスを明確にしたルールと、ルールに基づく取扱いということだろう。情報コミュニケーションの課題もあり、表に出ない内部情報や申し送り事項もあるはずとの意見があった。

次回執行部会まで事務局預かりの上、継続審議となった。

実行項目(ActionItem_170922-06) : 引き続き継続審議をする。事務局にてルール作りのたたき台を作成する。

14. その他

特になし。

<報告>

15. SCORE プログラムの現状報告 資料 6

事務局より、SCORE プログラムを立ち上げた経緯と現状報告があった。APL よりも短く、数日で、表層 100m くらいを限定して狙う。掘削提案書の作成のトレーニングとなることも考えている。旅費支援及び消耗品支給はなし。JAMSTEC/CDEX は「ちきゅう」で掘削オペレーションを行う。次回の締め切りは 11 月。このシステムを積極的に広めたい。

16. IODP の動向

- 掘削航海動向報告 資料 7
事務局より資料に基づく報告があった。木村会長より、Exp. 380 で開催するワークショップ” Core-Log-Seismic Investigation at Sea“を周囲に適当な学生がいれば、声がけをしてほしい旨のコメントがあった。
- 国際動向報告 (Australasian WS 報告、IODP Forum 報告) 資料 8
Australasian WS 参加者の報告書が配付された。IODP Forum meeting については報告書及び事務局による口頭での報告があった。JR 情報、中国の海洋科学情勢、海洋掘削科学 50 周年記念特集号の情報、次期 IODP Forum の議長任期は 3 カ年となったこと、2019 年の Forum meeting は大阪開催予定であることなどが報告された。
- 国際委員ローテーション 資料 9
事務局より、10 月 1 日に委員のローテーション時期となる旨の説明があった。

17. 陸上掘削部会の動向

小村陸上掘削部会長より、ICDP Training Course (11/5-10) への参加予定の報告があった。ICDP によって毎年開催され、旅費宿泊費のサポートがある。今年は日本から 2 名の応募があり、ICDP の選考を経て 1 名を送り込むこととなった。2017 年度のプロポーザルは、3 件あり、2 つは WS、プレプロポーザルである。日本人研究者からの提案が含まれている。

18. その他

以下のような議論があった。

- 執行部会は、TV 会議も取り入れ、コンスタントに情報共有していきたい。各議題 (30 分-1 時間程度) の予定時刻を決めておくことで、個別の議題だけ遠隔で参加できる仕組みを整えることも検討したい。早朝開催も選択肢。
- 次々回の 1/19 (金) 13:00 – 17:00 は Exp. 380 期間のため、木村会長は「ちきゅう」から Zoom 利用で参加する。